



Title	蘇軾の黄州左遷期の詩について : 甥安節を送る詩を中心に
Author(s)	山上, 恵
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2010, 44, p. 19-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8927
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

蘇軾の黄州左遷期の詩について

——甥安節を送る詩を中心に——

山上 恵

はじめに

元豊二年（一〇七九）、蘇軾は朝廷を誹謗する詩を書いた罪に問われ、御史台の獄に繋がれた。旧法党と新法党の政治闘争の中で起こった筆禍事件、いわゆる烏台詩案である。蘇軾は下獄中、死刑に処せられるのではないかと、いう恐怖と常に向き合わざるを得なかった。しかし、同年十月十五日、太皇太后が薨じたため、恩赦が下り死罪を免れ、檢校水部員外郎・黄州団練副使を責授し、左遷地の黄州へと赴くこととなった。この投獄・左遷という一連の出来事は蘇軾にとって今まで味わったことのない政治的・社会的挫折であった。

元豊四年（一〇八一）の冬、黄州滞在中の蘇軾のもとを、科挙試験に落第し蜀へ帰郷する途中の甥安節が尋ねてきた。安節がどのような人物であったかは未詳だが、蘇軾の従兄の不疑（字は子明）の子であったのではないかと考えられている¹⁾。蘇軾は、この甥との別れに際して「伯父『送先人下第歸蜀』詩云『人稀野店休安枕、路入靈関穩跨驢。』安節將去、為誦此句、因以為韻作小詩十四首送之（伯父の「先人の下第して蜀に帰るを送る」詩に云

う「人は野店に稀にして枕に安んずるを休めよ、路は靈関に入れば穩やかに驢に跨らん」と。安節將に去らんとし、為に此の句を誦し、因りて以つて韻と為し小詩十四首を作りて之を送る。」と題する詩を書いている（合注卷二十一。以下「送安節十四首」と略称する）。詩題からもわかるように、蘇軾の伯父にも科擧に落第した蘇軾の父、蘇洵を送る詩があつた。蘇軾はその詩句に用いられる十四の文字を韻字として十四首の五言絶句を作り、安節に贈つたのである。なお蘇軾には、五言絶句の連作はこの詩以外にも七例あるが、うち六例は叙景詩であり、一例は題画詩である。これらの作には「送安節十四首」のように自らの心情を率直に吐露した表現は見られない。その点から見ても、蘇軾詩のなかにあつて特異な作例として注目すべきである。

一・左遷への思い

「送安節十四首」は、帰郷する安節を見送る自分自身をうたうことから始まる。

其一

索漠齊安郡

索漠たり 齊安郡

従来著放臣

従来 放臣を著かしむ

如何風雪裏

如何ぞ 風雪の裏

更送独帰人

更に独り帰る人を送る

其二

瘦骨寒將斷 瘦骨 寒くして將に断たれんとし

衰髯摘更稀 衰髯 摘めば更に稀なり

未甘為死別 未だ死別を為すに甘んぜざるも

猶恐得生歸 猶なほ 生歸を得るを恐る

「齊安郡」とは黄州のこと。黄州が物寂しい土地であり、朝廷から放逐された臣下の流刑地でもあったことが述べられる。第一首には「風雪裏」とあるように、天候の悪い中安節を見送らねばならない悄然とした蘇軾の心境がうたわれる。第二首では、自らの肉体の衰えの描写とともに、「未甘為死別、猶恐得生歸」と、帰郷することができるとは分からない不安を訴えている。ここに見える「死別」「生歸」の語を詩中に使用する例は「送安節十四首」以外には見られず、故郷へ生きて戻れないことへの強い危惧が見て取れる。この二首には、帰郷が叶わぬ現状、そして今後罪が許されるのか分からない不安感が率直に表わされている。

このように、黄州の荒涼とした情景を描き、自らの不安な心境を述べる詩は黄州左遷期の詩の中で「送安節十四首」が初めてのものとなる。では、これ以前の詩に左遷地の黄州はどのように表されてきたのだろうか。黄州に到着してまもない頃の作、「初到黄州」（合注卷二十）の頷・頸聯では

長江繞郭知魚美 長江 郭を繞りて 魚の美きを知り

好竹連山覚筍香 好竹 山に連なりて 筍の香ばしきを覚ゆ

逐客不妨員外置 逐客 妨げず 員外の置なるを

詩人例作水曹郎 詩人 例として水曹郎と作るな

と、左遷地である黄州のことを風光明媚な土地であるといっている。黄州に左遷されたことに對する不安は述べられていない。また、元豊三年（一〇八〇）五月末に弟の蘇轍が左遷先の筠州からやって来た時の詩、「曉至巴河口迎子由」（合注卷二十一）の第二十一～二十四句でも、

此邦疑可老 此の邦 老ゆべきかと疑う

修竹帶泉石 修竹 泉石を帶ぶ

欲買柯氏林 柯氏の林を買わんと欲す

茲謀待君必 茲はかりごとの謀 君の必とするを待つ

と、「初到黄州」と同じく、左遷先で予期せぬ山水の風景に出会うことができたと喜んでゐる。そして、黄州で晩年を過ごすために土地を購入したいと望み、蘇轍に対して自分とともにここで余生を過ごさないかと誘っている。

黄州での生活に對する不安を述べるのではなく、黄州を好ましい環境だと述べるこれらの詩と「送安節十四首」の差は一体何に起因するのだろうか。おそらく、それは詩の言葉が向けられる相手の違いによるのであろう。「曉

至巴河口迎子由」についていえば、この詩を与えた相手の蘇轍は蘇軾の罪に連坐して、左遷を余儀なくされている人物である。蘇轍と同じく蘇軾の罪に連坐した友人である王鞏の詩に次韻した「次韻和王鞏六首」其一（合注卷二十一）の第十三～二十句でも、

我来黄冈下 我 黄冈の下に來たりて

欵枕江流碧 枕を江流の碧に欵つそはだ

江南武昌山 江南の武昌山

向我如咫尺 我に向かうこと咫尺の如し

春蔬黄土軟 春蔬 黄土軟らかく

凍筍蒼崖坼 凍筍 蒼崖坼さく

茲行我累君 茲の行 我 君を累するも

乃反得安宅 乃ち反つて宅に安んずるを得たり

と、自分の住む黄州が、長江、そして武昌山といった名所にも近く、気候も穏やかで食べ物にも不自由しない土地であることを述べている。左遷地であるにも関わらず、かえって心の安らぎを得ることができた。「曉至巴河口迎子由」同様のことが述べられるのである。「送安節十四首」の場合とは異なつて、蘇轍や王鞏といった自分の罪によつて左遷の憂き目に遭わせることとなつた人物に対しては、自らの現状に対する不安感を訴えることは避けられ

る傾向にあったのではないかと思われる。

また、同じく王鞏に送った「次韻和王鞏六首」其五には、

巧語屢曾遭惹苒

巧語

しばし屢ば曾て惹苒よくいに遭い

瘦詞聊復託芎藭

瘦詞

いざよ聊か復また託す芎藭きゆうきゆうに託す

という二句がある。前句は讒言を受けた馬援の故事を典故として用い、自分の気持ちを巧みに表す言葉のせいではないのないう誹りを受けてしまったと述べる。後句には、楚と蕭とが敵対関係にあったため、蕭人の還無社と楚人の申叔展が大つぴらに話すことができず、謎かけでもって会話した故事(4)を引き、今後は少ない言葉の中で隠語を使って気持ちを伝えようといっている。筆禍事件に巻き込まれた蘇軾は、詩を作る際に細心の注意を払わねばならなくなり、親しい人物に向けた詩のなかでも自分の本心を覆い隠した表現しか用いることができなくなっていたのである。著名な文人でもあり、罪を犯した官僚でもある蘇軾の作品は、常に第三者、特に朝廷の権力者の批判の目に晒される可能性があった。しかも、蘇軾が詩を送った相手である蘇轍や王鞏も蘇軾と同じ立場である文人官僚であった。そのため彼らに送った詩は、自ずと第三者の目を意識したものとならざるをえない。こうした理由から、彼らに向けて書かれた詩には黄州での不安が直截には述べられなかったのではないだろうか。なぜならば左遷に対する不安や不満を訴えることは左遷中の身としては当然避けるべきことであつたと考えられるからである。

これに対して、甥の安節は、科挙試験に落第し官僚になることができず、無名のまま帰郷する人物であつた。

「送安節十四首」其十二の第三・四句にも

汝幸無人知 汝幸いにして人の知る無し

莫厭家山穩 家山の穩やかなるを厭うこと莫かれ

と、安節が世に知られていない無名の存在であることが述べられる。このような人物に対して贈った詩であるため、「送安節十四首」では他の黄州左遷期の詩とは異なり、蘇軾は遠慮なく自分の気持ちを素直に表現できたのではないだろうか。

二・故郷への思い

「送安節十四首」のなかには、蘇軾が故郷に関する懸念を安節に伝え、自分の代理としてそれを処理するように依頼する言葉が見られる。

其五

諸兄無可寄 諸兄 寄すべき無し

一語會須酬 一語 かなら 会かならず須く酬ゆべし

晚歲俱黃髮 晚歲 とも 俱ともに黄髮たり

相看万事休 相看れば 万事休す

其六

故人如念我

故人 如し我を念えば

為説瘦樂樂

為に説け 瘦せて樂樂たりと

尚有身為患

尚 身の患いを為す有るも

已無心可安

已に心の安んずるべき無し

其五は、一族の兄たちを念頭に置きつつ、自分もまた年老いて人生の終わりにさしかかっているという言葉が述べられる。甥の安節への詩の中でこのように述べることで、遠く離れた地にいる兄たちへ人生に対するあきらめにも似た心境が伝わることを期待しているのだろう。其六では、がりがりに痩せ、病気がちの体だけが残る現状を故郷の友人に伝えるよう安節に依頼している。簡潔に自分の現状を述べるこれらの作から、蘇軾は兄たちや故郷の友人のことを気にかけていたことがうかがわれる。

また、兄たちや友人への伝言だけではなく、次に挙げる其八・其九のように、亡くなった妻の墓の管理を頼む言葉も見られる。

其八

東阡在何許 東阡 何許いすくにか在る

寒食江頭路 寒食 江頭の路

哀哉魏城君 哀しいかな 魏城君

宿草荒新墓 宿草 新墓を荒らす

其八は、「東阡」、すなわち故郷の畦道の回想から始まる。「東阡」の語は蘇軾詩のなかで「送安節十四首」の其八・其九・其十にしか用例がなく、弟の蘇轍や父の蘇洵にも使用例はない。施元之の注は韓愈の「唐正議大夫尚書左丞孔公墓誌銘」に「東阡」の語が用いられると指摘する。

愈又曰「古之老於鄉者、將自佚、非自苦、閻井田宅具在、親戚之不仕与倦而歸者、不在東阡在北陌、可杖屨來往也。今異於是、公誰与居。且公雖貴而無留資、何恃而歸。」

愈又曰く「古の郷に老いる者は、將まさに自ら佚せんとし、自ら苦しむに非ず。閻井田宅具りよびに在り、親戚の仕えざるものと倦みて帰りしものは、東阡に在らざれば北陌に在り、杖屨じょうくして來往すべきなり。今是に異なり、公誰と与ともにか居らん。且つ公貴しと雖も留資無く、何をか恃たのみて歸るや。」と。

ここでの「東阡」は「北陌」と対をなし、故郷の畦道の意で用いられていることがわかる。しかし「送安節十四

「首」における「東阡」は単なる故郷の畦道ではない。「寒食」という節句への言及が見られること、そして第二・四句で妻の墓が荒れているだろうと憐れんでいることから、妻の墓へ向かう道であることが暗示される。この妻とは最初の夫人王弗のことである。蘇軾が彼女の死に際して書いた「亡妻王氏墓誌銘」（文集卷十五）には次のようである。

治平二年五月丁亥、趙郡蘇軾之妻王氏、卒于京師。六月甲午、殯于京城之西。其明年六月壬午、葬於眉之東北彭山阜安鎮鄉可龍里先君先夫人墓之西北八步。

治平二年五月丁亥、趙郡蘇軾の妻王氏、京師に卒す。六月甲午、京城の西に殯す。其の明年六月壬午、眉の東北彭山阜安鎮鄉可龍里先君・先夫人の墓西北八歩に葬る。

これによると、王弗は治平二年（一〇六五）五月二十八日に没した。京城の西にしばらく安置された後、翌年六月に蘇軾の父母の墓の傍に葬られた。この記述より蘇軾の家の墓は眉州の東北にあったことがわかる。「東阡」とは、漠然とした故郷の東の道なのではない。一族の者ならば具体的に想像できる「東の道」を指していたと考えてよいだろう。これは「正月十八日蔡州道上遇雪、次子由韻二首」其一（合注卷二十）に見られる、故郷の旧宅の南軒を指す「南軒」と同様、一族の者ならば言葉だけでその対象を具体的に想像できる語であるといえる。妻の墓が荒れ放題になっていることだろうと想像する右の詩には、久しく故郷に帰ることができず妻の墓参りができない

の悲しみが切々と表現されている。これに対して「送安節十四首」其八は、同じように妻への墓がうたわれているとはいうものの、右の詞ほどには妻の追憶を直接表してはいない。墓が草で荒れているだろう、と妻の墓の管理が行き届いていないことを示すのみである。

其九

臨分亦泫然
分れに臨み 亦 泫然たり

不為窮途泣
途に窮まりて 泣くを為さず

東阡時一到
東阡 時に一たび到らば

莫遣牛羊入
牛羊をして 入らしむる莫かれ

其九は安節と別れようとする場面へと戻る。そして安節に向けて管理が行き届いていない妻の墓がこれ以上荒れないように、牛や羊などの家畜をむやみに入れるなと頼んでいる。「送安節十四首」は安節の帰郷に際しての作である。そのため、墓の管理の依頼という、蘇軾が抱えていた故郷にまつわる懸念が前面に出てきたのであろう。

以上、兄たちや友人への伝言、そして亡妻の墓の管理について安節へ頼んでいる作について見てきた。いずれも平易な言葉を用いて、あたかも手紙を書くかのように、帰郷する安節に故郷への思いを託している。その内容は、望郷の念を型どおりにうたう詩のように、観念的に故郷を美化したのではなく、現実的なことがらに則したものとなっているのである。

おわりに

「送安節十四首」には、「未甘為死別、猶恐得生歸」のように、自分の心情を飾らずに率直に表現した詩句が多く見られた。それには甥の安節という、気心の知れた血縁者にあてた作であることが深く関わっていたであろう。また、安節が政治的に全く無名の人物であったことも無視できない。ともに左遷された官僚である蘇轍や王鞏とのやりとりと比べて、自分の心情をより素直に表現することができたと推測される。

著名な文人として常に作品が他者の目に晒されることを意識せざるをえなかった蘇軾が、自らの心情を素直に表現した数少ない作品として、「送安節十四首」は注目すべき位置を占めていよう。

【注】

※本稿では蘇軾の詩は『蘇文忠公詩合注』（馮応榴輯訂 中文出版社 一九七九年）を底本とし、文は『蘇軾文集』（孔凡礼点校 中華書局 一九八六年）を底本とした。それぞれ合注、文集と表記する。また、詞は『東坡樂府』（上海古籍出版社 一九七九年）を底本とした。作品成立時期については『蘇軾年譜』（孔凡礼撰 中華書局 一九九八年）によった。

(1) 「姪安節遠來夜坐三首」（合注卷二十一）の查開補注に、「按後「冬至日贈安節」詩云「瞻前惟兄三」。本集「提刑公墓表」所謂「不欺、不疑、不危」也、与公為從兄弟、安節于三人中、不知為誰之子。詩又云「見此万里姪」。則新從眉州來明矣。又「小詩十四首」中云「吾兄喜酒人、今汝亦能飲」。則為不疑等益信。若子由之子、則應從宦游筠州、不当復入蜀也。」とある。王文誥（『蘇軾詩集』卷二十一 中華書局 一九八二年）及び孔凡礼（『蘇軾年譜』卷二十）は、「題子明詩後 并魯直跋」（文集卷六十八）の「吾兄子明、旧能飲酒、至二十蕉葉、乃稍醉。……（中略）……姪安節自蜀來。云子明飲酒

不過三蕉葉。吾少年望見酒盞而醉、今亦能三蕉葉矣。」を根拠とし、安節を不疑の子とする。

(2) 蘇軾の三首以上の五絶連作の題を以下に挙げる。

「次韻子由岐下詩」(合注卷三) 「二十一首連作」、「出都來陳。所乘船上有題小詩八首。不知何人、有感于余心者。聊為和之。」(合注卷六) 「八首連作」、「廬山五詠」(合注卷十三) 「五首連作」、「留題石經院三首」(合注卷十五) 「三首連作」、「初入廬山三首」(合注卷二十三) 「三首連作」、「雍秀才畫草虫八物」(合注卷二十四) 「八首連作」、「慈雲四景」(合注卷五十) 「四首連作」

(3) 『後漢書』馬援伝

初、援在交阯、常餌薏苡実、用能輕身省欲、以勝瘴氣。南方意以実大、援欲以為種、軍還、載之一車。時人以為南土珍怪、權貴皆望之。援時方有寵、故莫以聞。及卒後、有上書譖之者、以為前所載還、皆明珠文犀。

(4) 『春秋左氏伝』宣公十二年

還無社与司馬卯言、号申叔展。叔展曰「有麦麴乎。」曰「無。」「有山鞠窮乎。」曰「無。」「河魚腹疾奈何。」曰「目於魯井而拯之。」「若為茅經。哭井則已。」明日蕭潰。申叔、視其井則茅經存焉。号而出之。

(5) 『韓昌黎文集校注』卷七(馬其昶校注 馬茂元整理 上海古籍出版社 一九八七年)。訓説は『韓愈 II』(世界古典文学全集 清水茂訳 筑摩書房 昭和六十二年)を参照した。

(6) 「正月十八日蔡州道上遇雪、次子由韻二首」 其一(合注卷二十) 第五、六句
憶我故居室、浮光動南軒。

(7) 訳文は『蘇軾 下』(中国詩人選集 小川環樹注 岩波書店 昭和三十七年)によった。

(大学院博士後期課程学生)

概 略

淺析蘇軾黃州左遷期的詩
——以送侄安節的詩爲中心——

山上 惠

本稿以蘇軾的〈〈伯父“送先人下第歸蜀”詩云“人稀野店休安枕、路入靈關穩跨驢”。安節將去、爲誦此句、因以爲韻作小詩十四首送之〉〉詩(以下、略稱爲〈〈送安節十四首〉〉)爲中心進行探討。這是蘇軾被左遷黃州的元豐四年(一〇八一)冬、送與科舉落第於返鄉途中來訪的侄子安節的作品。

此時的蘇軾，不僅僅是有名的詩人，也是身在朝廷的“官人”。他人特別是中央政權如何理解自己的作品對他來說是不得不顧慮的事情。況且因爲筆禍事件(烏臺詩案)而遭到左遷之後，這更是他深爲顧慮的。但是，在蘇軾的〈〈送安節十四首〉〉中，他使用平易的語言率直的敘述自己的感慨，甚而進一步涉及到了私人問題。這是值得注目的。

與蘇軾送給同樣是官人而遭到左遷的兄弟蘇轍、朋友王鞏等人的詩相比，〈〈送安節十四首〉〉自由地抒發了作者蘇軾的感慨。其理由之一可以說是因爲表達對象是深知自己性情的血緣親族。而作爲這一親族的安節在政治上是完全不爲人所知的，這應該說是尤爲重要的一點吧。

キーワード：蘇軾，安節，黃州，左遷，故鄉